

第7講 ルネサンス

研究史

- ヴァザーリ 『名匠列伝』 古代の芸術の復活
- ディドロール ルネサンスという名称の使用と芸術に留まらず広い文化現象として捉える
- ブルクハルト 『イタリア・ルネサンスの文化』 自然と個人の発見 近代のはじまり
- ホイジンハ 『中世の秋』 ブルゴーニュ公国を対象とし、洗練された中世文化として評価

社会的背景

地中海交易によるイタリア諸都市の発展

- ドイツ人商人が銀を携えてイタリア諸都市を訪れる
- アジアから胡椒などの香辛料、染料の赤土、明礬、贅沢品の綿製品や絹製品の輸入
- ヨーロッパ各地から毛織物、銀、奴隷の流入。
- 交易都市としてヴェネチア（アレクサンドリアとの交易）やジェノヴァ（コンスタンティノーブルとの交易）の繁栄
- 金融・毛織物業でフィレンツェの繁栄。
 - バルディ、ペルッツィ、メディチなど
- 教皇庁所在地としてローマの繁栄

大商人層の支配

- 合理主義的思考
- 保守化→都市貴族化（メディチなど）

黒死病と金融破綻の影響

- 経済から文化に関心が向かう
- コンスタンティノーブルから多くの古典学者の亡命
- サロンの形成

大きな流れ

1300年代（トレチェント） 興隆期

1400年代（クワトロチェント） 発展期

1500年代（チンクェチェント） 完成期（巨匠の時代）

文学

ペトルルカ（『叙情詩集』）、ダンテ（『神曲』）、ボッカチョ（『デカメロン』）

美術

興隆期 チマブエ（『受胎告知』）、

ジョットー（『小鳥に説教する聖フランチェスコ』）

発展期 ボッティチェリ（『春』『ヴィーナスの誕生』）

ヴェロッキオ

完成期 ミケランジェロ（『ダヴィデ像』『ピエタ』）、

ラファエロ（『まひわの聖母』『アテネの学堂』）、

レオナルド=ダ=ヴィンチ（『モナ・リザ』）

ブルネレスキ サンタ=マリア=デル=フィオーレ寺院

宗教や道徳からの政治学の独立

グイッチャルディーニ（『ディスコルシス』）

マキャベリ（『君主論』）

自然科学

ガリレオ（『天文対話』）、ジョルダーノ=ブルーノ、

マルコ=ポーロ、アメリカ=ヴェスプッチ

北方ルネサンス

哲学 エラスムス、トマス=モア

文学 チョーサー（『カンタベリー物語』）、

セルヴァンテス（『ドン=キホーテ』）

美術 ファン・アイク兄弟、ブリューゲル、クラナッハ、デューラー

ルネサンスの三大発明

火薬・活版印刷術・羅針盤